

# 口頭発表「札幌市の小学校の動物飼育状況と本校の実践」

熊谷 雅史



## 1 札幌市の小学校の飼育状況

札幌市の飼育状況を把握するために、市内小学校204校にアンケートを配付し、119校から回答を得ることができた。その結果をもとに、以降述べる。

### (1) 飼育状況

市内小学校で飼育されている飼育種には、ウサギ、チャボ、ニワトリ以外にも、金魚、熱帯魚、カメなどが含まれている。そのうち、特に児童との応答関係が期待できる「ウサギ、チャボ、ニワトリ」を飼育している小学校は、全体の59%となっているが、年々減少傾向にある。

飼育していない学校の理由としては、「生きものが死んでしまってから飼っていない」という回答が最も多く、中には、「鳴き声がうるさいという地域の苦情から、仕方なく引き取ってもらった」という事例もあった。

以前はほとんどの学校でウサギやニワトリが飼育されていた。「ウサギが増えて困っているから引き取ってもらえないだろうか」という相談が学校間でなされるほどであった。しかしながら、「鳥インフルエンザ」の問題がもちあがったころから鳥類を飼育する学校が著しく減った。また、ウサギの去勢を無料で受けられる制度ができると、ウサギの数が減り、ウサギが欲しいという学校でさえも、なかなか確保することが難しくなっている。

したがって、市内の小学校では、どの学校でもほぼ飼育小屋（飼育舎）が設置されているが、その活用率は、高いとは言えなくなっている現状である。

### (2) 飼育の目的と飼育者

学校飼育の目的は、児童が生きものと直接かかわることを通して、生きものに対する興味・関心を高め、生命を尊重する態度や豊かな心を育てることにある。「情操教育」「教材」を目的としている学校が全体の50%となっているのに対し、「観賞用」「以前から飼われているから」と、飼育に対して消極的な学校も同様に見られる結果となった。

このような飼育に対する消極的な傾向は、飼育者や飼育に対する負担感と大きくかかわっているものと考えられる。「生きものの飼育」には教育効果や教育的な価値があることを認識していながらも、「継続的な飼育は難しい、大変だ」という思いが強いのではないだろうか。

市内の学校飼育は、ほとんどが「委員会」の児童とそれを担当する教師が中心になって行っている。

「委員会」とは…学習指導要領第4章「特別活動」に位置付けられる「児童会活動」の組織。学習指導要領では「学校の全児童をもって組織する児童会において、学校生活の充実と向上のために諸問題を話し合い、協力してその解決を図る活動」と記されている。学校規模にもよるが、5・6年生の児童が組織し、半期、または1年で構成メンバーが変わる。授業時間外で活動が行われる。

飼育を担当する委員会の児童は、生きものに対して関心の高い子ばかりとは限らない。同様に、担当教師も飼育に詳しい教師ばかりとは限らない点に課題がある。また、休校日や長期休業日となると、その体制は変わってくる。この場合、担当教師や、教師の輪番制で対応している学校が最も多い。

このような一部の児童、一部の教師が生きものとかかわる中、飼育で困っていることというのは、休校日や長期休業中の生きもの管理は、負担感につながっているようである。

中でも、ウサギ、チャボなど、温かみの

ある小動物の管理では、地域、保護者の協力、そして、専門的な知識をもった獣医師などと連携できる体制づくりが必要である。しかしながら、その体制が整っているとは言えない状況にある。

## 2 生活科における継続的な飼育・栽培単元の現状

「小学校学習指導要領解説 生活編」第1章 総説では、「自然に直接触れる体験や動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることを重視するなど、自然の素晴らしさや生命の尊さを実感する指導の充実に配慮する。」(P5より抜粋)と記されている。さらに、「生命に関する教育については、これまでも内容(7)『動植物の飼育・栽培』を2学年にわたって取り扱うこととしてきた。しかし、短時間の触れ合いで終わっている事例、児童が自分自身で行わない事例などが見られたことを踏まえ、生命の尊さを実感を通して学ぶという観点から、内容の取扱いにおいて『継続的な飼育、栽培を行うようにすること』の文言を加えることとした」(P7より抜粋)とも、記されている。つまり、学校現場において「継続的な飼育・栽培」が十分になされていないという課題を受け、それらを改善していこうという内容になっているのだ。各学校では、この内容を十分に理解し、活動に取り組んでいかなければならない。

様々な要因から、一部の学校では、栽培活動のみの活動になってしまったり、「継続的な飼育」を軽視してしまったりする例も見られる。広い敷地があるという利点や、近くに農家があるという地域の特徴から、「指導のしやすさ」が優先されてしまうということも、ひとつの要因ではないだろうか。

また、「第1学年でアサガオの栽培、第2学年でアメリカザリガニの飼育」といったように、どちらかの学年で取り扱えばよいのではという誤解もあり、「両学年での継続的な飼育」になかなか結び付かない学校もある。

札幌市では、飼育されている動物が教材として扱われていない場合が多い。これは、ウサギ、チャボなどの小動物に置き換えても、ほぼ同様の割合を示した。また、「生活科」という教科に限定してみると、さらにその割合が低くなる。

### 第1学年『いきものとなかよし』

(6時間扱い)

#### ○むしをさがそう(3時間)

校地内等で春とは違った虫などを探したり、捕まえたりする。



#### ○むしとなかよくなる(3時間)

見つけた虫を、生きものにあつたすみかを作って教室で飼育する。



《発展》どうぶつをかってみよう

### 第2学年『生きもの なかよし 大作せん』(9時間扱い)

#### ○生きものをさがしに行こう(2時間)

身近な自然で生きものを探しに行く計画を立てる。



#### ○生きものをつかまえよう(2時間)

友だちと協力して生きものを採集する。



#### ○生きものをそだてよう(2時間)

必要な世話を考え、継続して行う。気付きを表現する。



#### ○生きもの広場にしょうたいしよう(3時間)

育てた生きものについて、気付き等を身近な人に伝える。

生命をより実感できるのは動物との触れ合いである。動物との触れ合いは「命の尊さ」「責任感や忍耐力」「思いやりや優しさ」などを育むことが期待できる。さらに、生活科では「気付きの質を高める」ことが求められている。そのため、「動物の飼い方」「成長の変化」といった動物に対する気付きから、頑張っ動物のお世話ができた「自分への気付き」へと高めていく点でも、飼育活動は大変効果的な活動である。

市内では、札幌市教育委員会が発行する「札幌市小学校教育課程編成の手引き」(以降手引き)をもとにし、各学校の実態に合わせて年間指導計画を作成し、教育活動を実践している。生活科の学習も同様で、「手引き」をもとにして学習計画を構成している学校が多い。

「手引き」では、内容(7)を中心に構成される単元として、第1学年『いきものとなかよし』(6時間扱い)、第2学年『生きもの なかよし 大作せん』(9時間扱い)がある。

それらの単元の基本的な活動構成は次の通りである。

前述した学習指導要領で記されている課題が、市内の小学校でも伺える。つまり、第1学年では、栽培活動が中心で、飼育活動が不十分なのである。また、教室で何か生きものを飼育していても、生活科として扱われていない場合も多く見られる。

第2学年では、アメリカザリガニの飼育が約2/3以上の学校で実践されている。アメリカザリガニ（本来北海道には生息していなかった生きもの）は採集したものではなく、ほとんどの学校が業者から購入して、確保している。この点については、後に述べるが、これらの結果からも分かるように、命を実感できるウサギやチャボといった小動物を教材として扱い、実践している学校が極めて少ない。

さらに、第2学年で飼育活動を扱っていない学校では、第1学年でも扱っておらず、栽培活動のみの体験にとどまっている例も見られた。

その要因として考えられるのは、「飼育への不安」「指導のしやすさ優先」ということだけではない。教科書等で小動物の飼育が「発展教材」として扱われ、指導時数が確保されていないことも大きい。また、学習指導要領の内容が誤って理解されていること、「手引き」で2年間の継続飼育を強調していても、前年度と同様の学習計画で実践されている場合も考えられる。

### 3 飼育活動の充実に向けて

市内小学校の飼育状況と生活科における飼育単元の状況を踏まえると、たくさんの課題が明らかになった。しかし、この課題を悲観的にとらえるのではなく、望ましい状況へ改善していく手立てとしていくことが重要である。

そのひとつとして、アメリカザリガニ（以降ザリガニ）の取り扱いに着目したい。市内の多くの学校では、ザリガニを教材化しているため、「長期休業中の管理」以上に困っていることが分かった。ザリガニは、比較的飼育がしやすく、産卵、脱皮をして成長の様子がはっきり見られるなどの利点がある。しかし、学年終了時の扱いが難しい。それは、たくさん卵を産み、個体数が増えたときの扱いや、育てていたザリガニを家庭に返しても、飼育しきれないという現状があるからだ。実際、市内を流れる「創

成川」「安春川」では、ザリガニの生息が確認されている。これは、飼育を放棄した心ない飼育者が原因であると考えられる。さらに、業者も近年ザリガニの確保が難しくなっているようだ。そのため、「需要が多く高価になってきている」「購入してもすぐに死んでしまう」という課題も多く見られる。

教育的配慮からも、特定外来種である「アメリカザリガニ」の飼育を極力避け、より教育効果が期待できる小動物の教材化と飼育へと切り替えていく必要がある。

次に、飼育単元で得ることができる成果について着目したい。多くの課題がありながらも、飼育活動の実践者から、たくさんの成果が報告されている。「生きものに積極的にかかわろうとする態度」が育つとともに、「命の尊さを考えるきっかけとなった」「責任感や協力性が育まれた」「生きものへの愛着がわき、思いやりや優しい気持ちもてるようになった」という成果が多く得られている。他にも、「観察力が付いた」「気づきを表現することで、他教科への関連が図れ、学習が深まった」「自分への気づきとして高まった」など、生活科のねらいに結びついた成果も多かった。

これらの成果を十分に踏まえ、現状の飼育活動を改善し、小動物が教材化されることで、より一層の効果が期待できる。

学校飼育の充実に向けて以下の7点を取り組んでいく必要がある。そのためには、歩みは遅くとも、着実に努力していくことが大切である。

- (1) 小動物を教材化したよりよい実践を積み重ね、具体的な実践事例として広めていく。
- (2) 教育課程に小動物の飼育を位置付け、学年の発達に応じて、各教科、領域を関連させた指導を行う。
- (3) 適切な飼育を行うことができ、生きものに関心をもつ指導者を育成する。
- (4) よりよい飼育者を育てる観点から、飼育に対する知識と態度の両面を育てていく。
- (5) 校内体制として、教師間の連携を深めるとともに、養護教諭、用務員、事務官などの理解を得る。
- (6) 地域、保護者、獣医師などと連携し、無理なく動物の飼育が行える体制を整える。
- (7) 小動物が確保でき、飼育できる環境を整える。

#### 4 本校の実践～責任をもって生きものを飼育しようとする心と態度を育てる～

本校では、ウサギ、チャボなどといった小動物を飼育していない。2年前に飼育していた1羽のウサギが死んでしまい、それ以降は、飼育小屋は空の状態である。ウサギを飼育していた時は、地域に協力してくださる熱心なお年寄りがいて、担当する委員会の児童、教師が飼育を行わないほど熱心にウサギの世話をしていた。

新たにウサギを確保しようと、市内の多くの学校にお願いしたが、「子供がかわいくなって、名前も付けているから…」「数が少なくて分けてあげられない」という回答ばかりであった。新たに購入することも考えたが、寒さの厳しい冬に飼育するには、越冬を経験したウサギを確保することが最善であろうという多くの意見があり、断念することとなった。

そこで、「ウサギを飼育していない今だからこそ必要なことは何か」「今後の動物飼育に向けて必要なこととは何か」を考えた。飼育活動の課題として、「一部の児童のみが飼育にかかわっていること」「生活科における学年終了時の生きものの飼育」などがあげられる。これらを踏まえたとき、「責任をもって飼育しようとする心と態度」を育てることが、最も重要であると考えた。つまり、継続的に小動物とかかわることで、自ずと「愛着」「優しい心」が育つ。また、「命の尊さを実感する」こともできる。その基礎として、「責任をもって飼育しようとする心と態度」がしっかり育っていなければ、小動物を飼育することは難しいと考えたのだ。

本実践は、学校で小動物を実際に飼育していないため、知識中心の学習になることが懸念される。そこで、ゲストティーチャー〈以降G T〉(円山動物園飼育員・札幌市動物管理センター・獣医師)の協力を得て、各学年の発達段階、そして、学習内容との関連を図りながら、できる限り体験的・実感的に学習できるように配慮した。

##### (1) 第2学年 生活科『生きものとなかよし』の実践

児童はザリガニの飼育を通して、生きものに親しもうとする意識と飼育に対する自信を深めている。この学習の発展として、これまでの学習経験を生かし、さらに他の生きものを飼育しようとする意欲を育てる。

そのために、飼育小屋に着目し、どのような生きものが育てられそうか、そのためには何が必要かを考えられるように活動を構成する。さらに、円山動物園の職員とのかかわりを設定し、実際に動物と触れ合ったり、飼育に必要なことをインタビューしたりしながら、実際に生きものを飼育することの楽しさ、素晴らしさに気付くようにする。

##### 《単元の目標》

- ・生きものやそれらの育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、生きものに親しんだり、大切にしたりしようとしている。
- ・生きものを飼うことについて、自分なりに考えたり、工夫したり、振り返ったりして、それらを素直に表現している。
- ・生きものは生命をもっていることや成長していること、生きものと自分とのかかわりに気付いている。

##### 《活動構成》(9時間扱い+発展5時間扱い)

- ・生きものの飼育の発展から、飼育舎でウサギを飼育できそかを考える。(1時間)
- ・ウサギについて調べたり、情報を集めたりする。(1時間)
- ・札幌市円山動物園の職員からウサギのことを聞いたり、抱き方や飼育の仕方を教えてもらったりする。(2時間)
- ・これまでの体験をカードにまとめ、円山動物園の方に伝える。(1時間)

##### (2) 第4学年 総合的な学習の時間『いのちタイム』の実践

児童は総合的な学習の時間で『マイタウンⅡ～環境編～』という単元を学習している。個々に課題を設定し、地球温暖化現象、酸性雨、身近な節電・節水などについて調べたことをまとめ、互いに交流する活動を行っている。中には飼育について調べ、生態系への影響について考えた児童もいる。そこで、その後に設定されている『いのちタイム』(4年以上の全ての学年に設定されている、命の大切さを学ぶ学習。本来、保健との関連を強め実践してきた)を活用し、責任をもって飼育することの大切さを知らるとともに、命の大切さを実感する活動を構成した。そのために、ゲストティーチャーとして札幌市動物管理センターの職員を招き、動物飼育についての現状や飼育のマナー、動物とのつきあい方などについて教えてもらう場を設定する。さらに、動物を飼育するためには、飼い主の責任が重要であ



り，それが，命を大切にすることと結び付いていることに気付かせていく。

《単元の目標》

・動物にも大切な命があることを考え，飼育するためには，マナーや責任が必要であることを知るとともに，自分ができることを考える。

《活動構成》（5時間扱い）

- ・『マイタウンⅡ～環境編』で学習したことを振り返る（1時間）
- ・特定外来生物の現状から，飼育者としての責任を考える（1時間）
- ・札幌市動物管理センターの取り組みや飼育者のマナーを知る（2時間）
- ・これまでの学習を振り返り，学校全体に伝える。

### (3) 第5学年 総合的な学習の時間『いのちタイム』の実践

この実践は「飼育」に直接かかわるものではない。しかし，生命の不思議さ，大切さを児童に実感させるためには，大変有効な学習となった。

第5学年の児童は，総合的な学習の時間で『すごいぞ！牛乳』という単元を学習している。インタビューや見学なども行い，牛乳についてかなり詳しく調べ上げていた。ただ，牛のことや酪農にまで目を向けた児童は少ない。そこで，牛乳をつくるために獣医師がかかわっており，なくてはならない存在であることを知らせる。児童は「獣医師は動物の病気やケガを治すお医者さん」と認識している。そのため，児童の興味や関心は非常に高まった。

その後，実際に獣医師を招き，お話をしていた。日々動物と向き合い，命を守っていること，小さな生きものにも大切な命があること，人間が生きていくために食べているものにも大切な命があるということなどを具体的な事例をもとに語っていた。

児童はあらためて「命」について考える

（札幌市立栄南小学校教諭）

